社 会 科

公民としての資質・能力の基礎を育成する社会科学習

～生徒一人ひとりが学習過程をデザインする指導の工夫～

石　髙　吉　記
細　野　悠　司
髙　橋　佑　樹

1　本校社会科のこれまでの取り組み

社会科研究主題「公民としての資質・能力の基礎を育成する社会科学習」	H23-25　言語活動を通した思考力・判断力・表現力を高める指導と評価のあり方
	H26　学習指導法の改善　-他者との関わりを通した学習指導-
	H27-29　社会を主体的に生き抜くことができる生徒の育成
	H30　新学習指導要領に基づく学習指導法の改善
	R01　「主体的・対話的で深い学び」の実現による資質・能力の育成 ～「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の在り方～
	R02　資質・能力を育む指導と評価の一体化の在り方
	R03　生徒が自ら問い続ける単元計画の工夫
	R04　必要感がある協働的な学びを生み出す学習指導の工夫
	R05　生徒一人ひとりが学習過程をデザインする指導の工夫

2　研究主題・副題について

(1) これまでの本校の取組から

本校社会科では「公民としての資質・能力の基礎を育成する社会科学習」の具現化を目指し，「社会科学びの地図」を活用した授業の研究を推進してきた。その成果として，①「見方・考え方」を働かせる授業を意識して取り組むことができ，「問い」の工夫により生徒が主体的に学習に向かうことができたこと，②「社会科学びの地図」を活用し見通し、振り返りの活動の充実を図ることで，学習改善につなげることができ，「主体的に学習に取り組む態度」を育成できることが生徒たちの取り組みからわかった。

(2) 本校社会科が考える「挑戦心」の具体

昨年度，本校社会科において，総論を受けて本校社会科で育成したい「挑戦心」の具体を学習プロセスにおいて以下のように整理した。(**図１**)

段階	課題発見		探究活動		課題解決	
	課題に気付く	見通しをもつ	計画を立てる	調査・考察をする	まとめる	振り返る
学習活動	・資料等から課題意識をもつ。	・学習問題を設定し，予想や仮説を立て，今後の学習の見通しをもつ。	・予想や仮説より，調べたり考えたりするための手立てを考える。	・手立てをもとに，資料等の収集・分析を行う。 ・収集した資料を多面的・多角的に考察・判断し，課題解決に向けてまとめていく。	・調べたり，考察したりしたことを整理・発表し，相互評価を行う。	・学習を振り返り，思考の再構築を行う。また新たな課題を見出したり発見したりする。
挑戦心の具体	・よりよい社会の実現に向け，解決しなければならない課題を考えている。	・これまでの学習から課題解決に役立ちそうな学びを想起している。	・課題を解決するために，学習目標や学習方略などをこれまでの学びから考えている。	・他者の意見から，多面的・多角的に考察・判断するための情報を得て，自分の課題解決に生かしている。	・他者のまとめから，よりよい社会の実現に向け，解決策を構想している。	・学習したことから，よりよい社会の実現に向け，現代社会の課題の解決に思いを巡らせている。

図１　本校社会科部が整理する学習プロセスにおいての挑戦心の具体の姿

上記のことから，本校社会科が考える「挑戦心」は，**「学習活動において，課題の解決から，よりよい社会の実現を目指す姿」**と考えた。

(3) 本校社会科の授業を通して育みたい生徒像

前述の通り、本校社会科では「公民としての資質・能力の基礎を育成する社会科学習」の具現化を目指し研究を重ねてきた。今回、挑戦心がどのように醸成できるかを研究するにあたり、「公民としての資質・能力の基礎が身に付いた生徒」を社会科の授業を通して育みたい生徒像と設定した上で、どのような非認知能力を育成することが、育みたい生徒像に近づくことができるかを中山（2023）が提唱した「アイデアドーナツ」を用いて整理した。（**図２**）

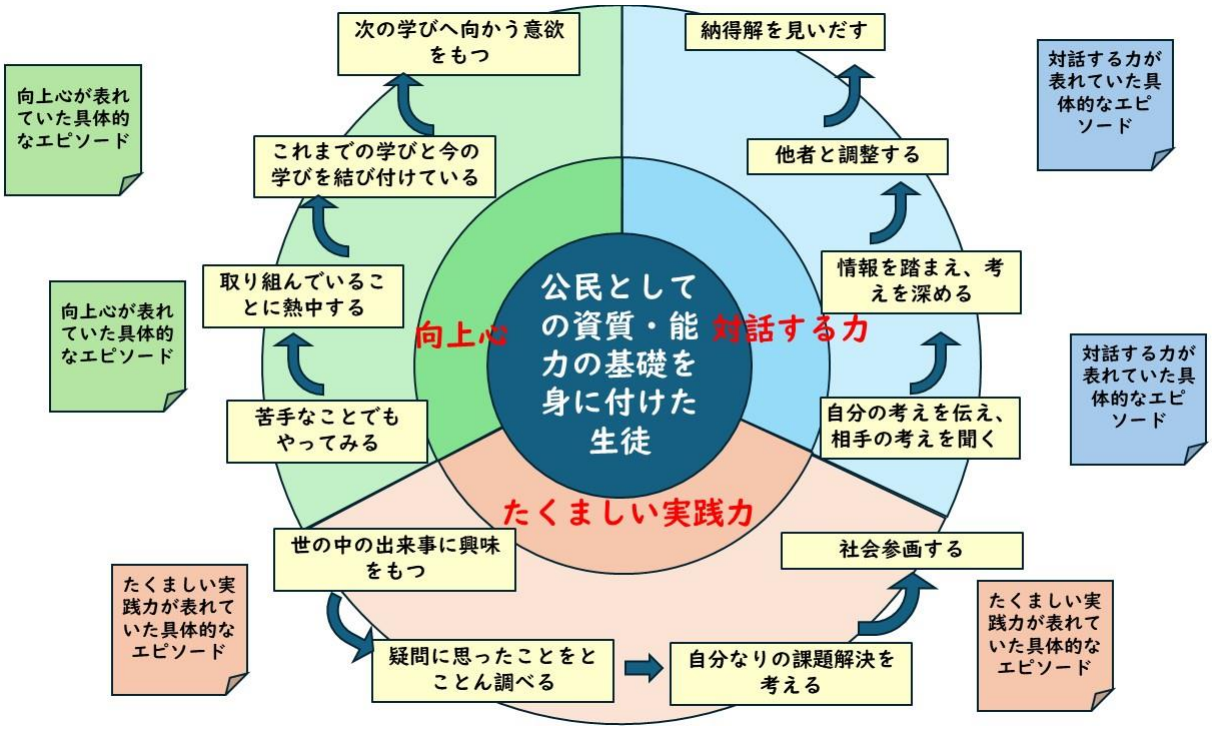


図２　本校社会科が整理した育てたい生徒像「公民としての資質・能力の基礎を身に付けた生徒」のアイデアドーナツ

まず、本校社会科が育てたい生徒像「公民としての資質・能力の基礎を身に付けた生徒」の実現のために育てたい非認知能力を構成要素として「向上心」「対話する力」「たくましい実践力」の３つに具体化した。次に、それらの非認知能力が子供たちに表れていた活動の場面を想起し、エピソードとして整理していった。以下に具体的に示す。（**表１**）

３つに分けた非認知能力	表れていた具体のエピソードの例
○向上心	・中部地方の学習で「産業が盛んな中部地方では、どこに企業進出するべきか」という課題において、１年生の時に学習した北アメリカ州の学習の産業が盛んな地域の特徴を生かして、よりよい課題解決につなげていた。 ・身近な地域の歴史の学習で「次世代に伝えたい地域の歴史はどのようなものだろう」という課題において、小学生に地域の歴史を伝えるのに、小学生の実態を踏まえて、より平易な言葉を選んだり、根拠を明らかにしたりして、よりよい伝え方を検討していた。

○対話する力	・裁判の学習で「１８歳成人として、裁判にどのように関わるべきだろう」という課題において模擬裁判を行ったとき、他のグループの意見の根拠が明確であり、自分たちの意見と比べ話し合った結果、考えを改めた。 ・南アメリカ州の学習で「環境問題と経済開発は両立できるのだろうか」という課題において、初めは経済開発に否定的だった生徒が、他者の意見を聞き、自分の身近な地域でも経済開発が盛んに行われていることに気づき、考えを変容させた。
○たくましい実践力	・身近な地域の歴史の学習で「次世代に伝えたい地域の歴史はどのようなものだろう」という課題において、小学生に地域の歴史を伝えるのに、実際に博物館に行ったり、現地調査を行ったりして、さらによりよいものにしようとしていた。 ・裁判の学習で「１８歳成人として、裁判にどのように関わるべきだろう」という課題において、実際に裁判所に出向き傍聴し、学びに生かそうとした。

表１　３つの非認知能力が子供たちに表れていたと考えられるエピソードの例

そうして整理した具体的な姿を抽象化し、それぞれの非認知能力に分け、段階的な行動指標として整理した。（表２）

本校社会科で育てたい生徒像	３つに分けた非認知能力	段階的な行動指標
公民としての資質・能力の基礎を身に付けた生徒」	向上心	①得意不得意に関わらずとりあえずやってみる ↓ ②取り組んでいることに夢中になる ↓ ③これまでの学びを今の学びに結びつけている ↓ ④次の学びへの意欲を持つ
	対話する力	①自分の考えを他者に伝え、他者の考えを聞く ↓ ②他者の考えを聞くことで、自分の考えを深める ↓ ③自分の考えと他者の考えを調整する ↓ ④納得解を見出す
	たくましい実践力	①世の中の出来事に興味を持つ ↓ ②調べたいと思ったことをとことん調べる ↓ ③自分なりの答えや解決策を見出す ↓ ④社会参画する

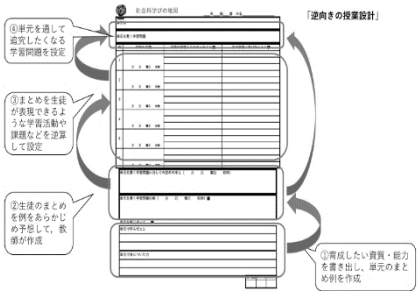
表２　「公民としての資質・能力の基礎を身に付けた生徒」の段階的な行動指標

このように行動指標を本校社会科の中で整理することにより、教員間の中でどのような授業を通して、生徒たちの資質・能力を育成すればよいか、考えを共有することができた。また、行動指標を明らかにすることにより、抽象的な育てたい生徒像を言語化することができ、指導の改善に生かすことができた。今後は、この行動指標を生徒と共有しルーブリックとして示すことや、生徒とともに考えることで、「育

てたい生徒像」を生徒自身が「育ちたい生徒像」にしていきたい。

３　社会科振り返りシートと「挑戦心」の関わり

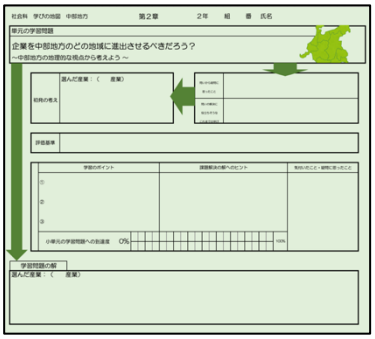
（資料１）



「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し，学習したことの意義や価値を実感できるようにすること」という点において，本校社会科では学習したことの意義や価値を実感できる取り組みとして，「社会科学びの地図」というポートフォリオ形式のワークシートを活用している。（**資料１**）小単元や中項目ごとのまとまりで一枚、振り返りシートをＧＩＧＡスクール構想に基づく一人一台端末を用いて記入し，振り返り等を行い，データで積み上げている。主な記述内容としては、小単元や中項目のまとまりを貫く学習問題の初発の解、課題解決に生かせそうなこれまでの学び、毎時間の学び，振り返り，小単元や中項目のまとまりの学習を終えて、学習問題に対する解などがある。教師は，学習のまとまりや単元や中項目の学習が終わるごとに評価を行い，生徒の記述に学習を支援する記述を書き込み返却した。この際、生徒の学習における変容を教師が把握したり，学習の支援を適切に行う形成的な評価の役割をもたせたりするよう，工夫・改善を行う。個別最適な学びという点においては，生徒が毎時間記入する振り返りにおいて，教師側が簡単なフィードバックを行うことで，生徒自身がそれぞれの学習目標や学習方略に基づいた課題解決の方向性を確認できたり，足りない視点を補えたりすることができる。そういった形成的評価を教師側が行い，生徒自身が学習改善に活用している。詳細な活用方法については，４　**研究の実際【手立て１】**と各分野の当日資料を参考にされたい。

４　研究の実際

地理学習における「日本の諸地域」の単元では、空間的相互依存作用や地域などに関わる視点に着目して、地域の特色ある地理的な事象を他の事象と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現する力を育成することを主なねらいとしている。そうした学習の全体を通して、日本の諸地域の地域的な特色や地域の課題とともに事象間の関係性を理解できるようにすることが求められている。



本校の社会科では地理学習における地理的な視点を「自然環境」「人口」「産業」「交通・通信」「生活・文化」「環境保全」として捉え、Ｃ日本の様々な地域「（１）地域調査の手法」から「（４）地域の在り方」を通して単元計画を行なっている。

「（３）日本の諸地域」における中部地方の小単元を通して、ＡＲサイクルを重視した探究活動における自己評価活動と、評価活動における自己と他者の相互作用に関する研究にも着目しながら、学習場面をデザインした。

単元を貫く課題を「企業を中部地方のどの地域に進出させるべきだろう？～中部地方の地理的な視点から考えよう～」とし、起業をするという生徒にとって困難かつ興味関心の高い課題を設定した。今までに学習してきた地理的な視点やＧＩＳ（地理情報システム）を活用して得た多くの情報から、他地域との異なる視点、他者との相違点に多く触れる場面を設定することで、困難に向き合い、試行錯誤するなどの挑戦する学びの場面となると考察した。また振り返りの質を高める「見通し」と「振り返り」の充実については，本校社会科で行う「学びの地図」を活用し、生徒自身の

「見通し」と「振り返り」を見える化し、さらに教師による形成的評価によって「見通し」と「振り返り」を修正しながら進めていくという学びのサイクルを可能にすると捉えた。今回の単元では、今まで学習してきた地理的な視点を活用しながら「見通し」をもち、教師からの形成的評価や、ウェビングマップを活用した思考の具体化、ＧＩＳ（地理情報システム）を活用した情報収集、他者との協働の中で新たに得た「見通し」を発見し、「振り返り」を繰り返しながら中部地方の特色や他地域との比較を重ねることで、中部地方の特色ある地理的な事象を他の事象と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現する力を育成できると考察した。また、単元後半に各企業の報告を相互に評価する場面を設定するだけでなく、単元の最初に「評価基準を作る活動」を設定した。自ら（学級全体）で評価を決めることで、見通しにつながるだけでなく、自分の認知活動の明確化にもつながり、まとめ時に自らが設定した評価基準に迫ることができているか相互評価を行うことで、自律的な学びを促進するための有効な手立てとなることを狙った。

成果として、評価基準を設定する上で、地域調査の単元より重要な視点としておいている地理的な視点をあげることで、「起業の仕方」や「利潤の生み方」など公民分野に偏った発表とならないよう留意した。単元の最初にグループごとのウェビングマップ作成を行い、最終的にどのような地域の選び方が良いのか考えを深めることによって、生徒自ら評価基準の必要感を見出していた。グループごとに評価基準をあげ、事前に打ち合わせを行なった社会係を中心に議論を行いながら、クラスごとの評価基準を完成させた。

評価基準の作成

クラスが設定した評価基準の例

Ｘ組	複数の視点から考えられた、社会的批判が少ない、地域ならではの持続可能なプランか
Ｙ組	他の地域との比較し、中部地方の特色をとらえ、立体的な視点をもってプレゼンをしているか

授業を通して地理的な視点を捉えさせていることで、「この地域ならではでなければ意味がない。」「複数の地理的な視点から捉えるべきだ。」など、他地域との比較や、空間的相互作用等の地理的な見方・考え方に触れながら評価の基準を設定する様子がみられた。第一次では、「産業」をキーワードとし、中部地方の自然環境、交通、生活文化等の地理的な視点について学び、単元を貫く課題に迫る情報収集を行なった。その後「飲食業」「アパレル業」「ＩＴ産業」の３つの産業から進出する企業を設定した。評価基準を示しながら、ＧＩＳ（地理情報システム）を用いて個人で考える、同じ産業を選んだグループ、同じ地域を選んだグループで考える、教師による声かけを受けて考えるなど行うことで、生徒が地理的な見方・考え方を働かせながら意見をする場面が多くみられた。その後グループとなり、評価基準に基づいた報告を行い、グループごとに振り返りを行い、学びの地図を記入させた。活動の中で「ただ地理的な視点について説明するだけでなく、中部地方の一つの特色を、他の地域と比較したりすることが大切だ」「その地域が発展していくことに目を向けることも大切である」「起業の仕方や利益の生み方についても考えたい」「中部地方だけでなく、日本全体で考えてみたい」など、今までの地理学習を活かしたり、これからの授業について見通しをもつような発言や記述も多くみられ、まさに挑戦心をみせる生徒たちが多くみられた。

報告をまとめる

発表

相互評価

地理学習で活用しているＧＩＳ（地理情報システム）

国土交通省「国土地理院 地理院地図」	RESAS 地域経済分析システム
地理情報分析支援システム　今昔マップ	MANDARA

５　研究の成果と課題

成果としては資質・能力の高まりが見られた。問いの工夫や試行錯誤する場面を意図的に設けることや社会や他者とのつながりを明確に示した
学習に取り組むことで，生徒自身が必要感をもって協働的な学びに向かうこ
とができた。その結果，単元を通して身に付けたい資質・能力の高まりが振り返りのワークシートから見取ることができた。

課題としては「挑戦心」の評価の在り方がある。課題解決にそれぞれの学習目標や学習方略をもち，主体的に取り組んでいる生徒は，学びの地図の記述やアンケートの結果から増えていることがわかった。しかし，それを生徒自身が有用だと実感する手立てがまだ少ない。生徒自身が学習改善を行う，形成的評価を行うことや，他者からの評価の有用性を検証していかなければならない。

引用・参考文献

・中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　総則編
・中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　社会編
・奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』東洋館出版社，2017
・澤井陽介・加藤寿朗『見方・考え方　社会科編』東洋館出版社，2017
・田村学『深い学び』東洋館出版社，2018
・独立行政法人教職員支援機構編著『主体的・対話的で深い学びを拓く』学事出版，2018
・工藤文三編著『平成 29 年改訂中学校教育課程実践講座社会』ぎょうせい，2018
・田中保樹・三藤敏樹・髙木展郎編著『資質・能力を育てる学習評価』東洋館出版社, 2020
・堀哲夫(監修), 中島雅子(編集, 著)『一枚ポートフォリオ評価論 OPPA でつくる授業』東洋館出版社，2022